

榮山江流域の古代政治体を見とおすすめ多様な視角

Perspectives on the Ancient Political Bodies of the Yeongsan River Basin

権五栄

KWON Ohyoung

はじめに

- ① 近肖古王の南征についての多様な視角
- ② 榮山江流域の物質資料についての解釈
- ③ 韓半島と日本列島の交流についての認識
- ④ 韓半島西南部における倭系古墳の多様性

おわりに

【論文要旨】

本稿では、榮山江流域の政治体の性格や、三国時代における倭と榮山江流域の交流についての既存の見解を整理し、今後の研究の進展のための概念の定義、研究方法論の提示を試みた。具体的には、近肖古王の南征、榮山江流域の物質資料、韓日関係史における渡来人や倭系文物などについてのこれまでの解釈について再検討し、課題と展望を整理した。

その中で、特に榮山江流域を含む韓半島西南部における倭系古墳について注目し、その被葬者の性格についてA～Fの類型化を試みつつ、その多様性についての考慮がさらに必要なことを指摘した。あえて述べれば、榮山江流域の前方後円形古墳の問題は、古代韓日関係史に関連する様々なテーマのひとつにすぎず、前方後円形古墳または倭系古墳の被葬者像やその出現背景を、単純明快に提示する時期はすでに過ぎたのであろう。

倭系古墳に認められる多様性は、そのまま当時の韓半島南部と日本列島の交渉が非常に多元的であったことを示している。すなわち、国籍、血統、身分などが多様な人びとが、多様な目的（政治外交、戦争、商業など）を持って、多様な経路を利用して往来を重ねる、そのような躍動的な活動の結果が反映されたものと把握すべきである。

その実態を着実に解明していくためには、榮山江流域や韓半島南海岸などの限定的な地域のみを対象とするよりもむしろ、韓半島南部と日本列島全体を視野に入れた幅広い研究が必要であらう。

【キーワード】 馬韓、榮山江流域、倭系古墳、多様性

はじめに

21世紀に入り、古代韓日関係史についての研究は、韓半島東南部の加耶や新羅ではなく、栄山江流域を舞台として展開している。栄山江流域の古代政治体に対する名称としては、馬韓、沈彌多禮などが用いられており、それ以外にも『梁職貢図』や『日本書紀』に出てくる多数の国名や政治体の名称を、この地域に比定する見解も多い。

韓国古代史における馬韓という用語は、その意味や指し示すところが非常に多重的であり、また時間の流れによって変化をみせる。すなわち、『三国志』、『三国史記』、『晋書』の馬韓と、『宋書』の慕韓は、同一の対象を指示しているのではなく、変化しているということである。それゆえに馬韓と百済の関係についての理解において、様々な問題点が出出しており、栄山江流域の政治体の実態に接近していく作業にも、多くの混乱をきたしている。

本稿では、栄山江流域の政治体の性格についての既存の見解を整理し、今後より深度のある立体的な研究を進めていくための概念の定義、研究方法論の提示などを試みたいと思う。

①……………近肖古王の南征についての多様な視角

4世紀中葉における百済の近肖古王の南征については、研究者ごとに多様な見解が提示されており〔梁起錫ほか2013〕、大きく3つに区分することができる。

1. 軍事征服を認定する見解

4世紀中葉に、百済の近肖古王と近仇首王の父子が、馬韓地域に対する軍事的な征服戦争を進め、加耶地域に対しても何らかの影響力を行使するようになったという見解である。これは韓国の文献史学界における主流的な見解である〔朱甫暎2000、鄭在潤2010〕。この見解に従えば、栄山江流域は4世紀中葉以後、百済の領域に編入されたことになる。

その場合、4世紀中葉以後の百済の地方支配の痕跡を探す必要があるが、わずかに発見される百済中央様式の土器数点を除けば、ほとんど認められない。また、5世紀以後の栄山江流域における古墳の高塚化、百済中央と異なる墓制や葬制に対する説明が必要となってくる。その一方で、高句麗による楽浪・帯方故地の占領、新羅の辰韓故地の征服に認められるように、新たに吸収した領土の物質文化が中央のそれと異質な様相を示す期間が、一定期間存在することも確かである。よって、栄山江流域の状況と、上述のような地域の状況を比較すれば、多くの部分が説明可能となつてこよう。

2. 軍事征服を否定、あるいはその時期を遅らせる見解

近肖古王代における馬韓征服自体を否定し、百済による栄山江流域の編入時期を6世紀以後と見る立場もある〔林永珍2000、姜鳳龍1999a・1999b・2000〕。この場合、4世紀中葉から6世紀前半まで、栄山江流域は独自勢力として維持されていたこととなり、5世紀に大型化する甕棺古墳の築造は、

百済中央に従属していない栄山江流域勢力の独自性を表象するものと評価される。

ただし、4世紀中葉以降の百済中央との関係をどのように定義するのかについては、依然として問題が残っている。栄山江流域の政治体と百済中央の間に、全く関係がみられないと主張する研究者はいないが、それが対等な関係であったのか、緩やかな上下関係であったのかについては、見解の一致をみていない。4世紀中葉からほぼ200年近い期間、栄山江流域の政治体と百済中央の関係は決して、単一なものではなかったであろうから、段階別に関係の変化の過程を追跡する努力が必要となろう。

3. 過程を重視する見解

これまで指摘した2つの見解の問題点を指摘しつつ提示された折衷案である〔朴淳發 1998, 権五栄 2005・2007, 金洛中 2009〕。まず、4世紀中葉頃の近肖古王による軍事行動は認定されるが、この事件によって栄山江流域の政治体が百済に完全に吸収されたということではない、という立場である。栄山江流域に対する領域化と完全な地方支配までには、多くの時間が必要であったと把握する段階論の立場において、その過程を重視している。

②……………栄山江流域の物質資料についての解釈

1. 甕棺古墳についての解釈

栄山江流域の政治体の性格を理解するうえで、最も注目できるのは大型の甕棺古墳である〔成洛俊 1997, 姜鳳龍 1999a・2000〕。百済中央は無論のこと、高句麗、加耶、新羅いずれにおいても確認できない大型の専用甕棺が、この地域固有の墓制であることは認められ、その独自性が注目されてきた。

また、日常生活用土器を再利用した転用甕棺ではなく、ひたすら埋葬のために器壁の厚さが10cmに達する大型の専用甕棺を用いた墳墓は、「甕棺古墳」として、別途の扱いを受けてきた(図1)。そして、大型専用甕棺に埋葬された集団とそうではない集団の差異、甕棺の大きさや副葬品による差異、そして甕棺を覆う墳丘や規模による差異が抽出され、その差異は階層性と結び付けて解釈されている。5世紀における栄山江流域における最高首長層の墓制は、大型専用甕棺を用いた甕棺古墳であり、それがすなわち「馬韓の王墓」である、という論理が展開されたのである。

近年では甕棺〔국립나주문화재연구소 2009・2010〕や甕棺古墳についての高い関心の中で、甕棺古墳を造営した栄山江流域社会を理解するための資料が集成され〔국립나주문화재연구소 2012〕、研究が進展している。また、この地域の独特な古墳築造技術を把握する研究〔韓玉珉 2016, 임지나 2016〕も推し進められ、三国時代の他の国家や日本との比較研究のための基盤が築かれた。

2. 前方後円形古墳についての認識の変化

栄山江流域では、三国時代の墳墓に一般的な円墳や方墳とは異なる、異質的な墳丘を備えたものが分布しているという事実、初めて注目した研究者が姜仁求氏である。氏によって、ソウル、栄

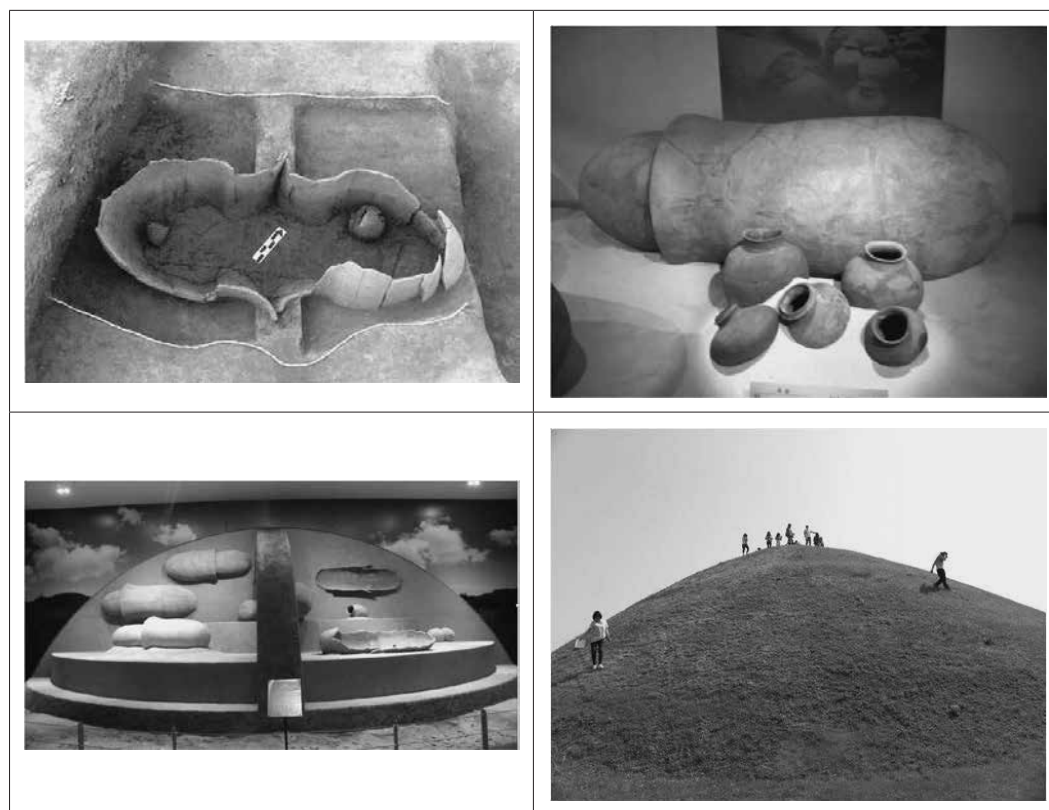


図1 柴山江流域の甕棺墓と甕棺古墳

山江流域，固城などの韓半島中部以南の各地で前方後円形の墳丘が発見，紹介された。それまで，日本の古墳時代の固有な墳墓として知られていた前方後円墳が韓半島にも存在するので，日本列島の前方後円墳の源流は韓半島にあるという主張〔姜仁求 1984・1987〕が発表されたのである。

しかし，韓半島の前方後円墳の存在を主張する声は，当初はなかなか認められなかった。そして，工事区域内の遺跡についての救済（行政）発掘調査が義務的に行われるようになった1990年代に入り，光州月桂洞に所在した古墳2基が発掘調査され，その墳形が明らかに前方後円形であることが確認された（図2）。その後，咸平新徳古墳，光州明花洞古墳などが相次いで調査されたり，全羅北道の高敞，全羅南道の海南，潭陽などに分布する古墳の精密測量調査が進んだことで，柴山江を中心とした韓半島西南部に前方後円墳と類似する古墳が10基余り分布することが明らかとなった。

古墳の規模は，海南長鼓峯古墳が墳長77mと最大であり，咸平馬山里杓山古墳が70m程度，中間クラスに属する海南龍頭里古墳が55m，小型に属する羅州佳興里新興古墳が30m程度である。石室の形態や構造は，それぞれ若干差異があるが，日本の九州各地に分布する石室との類似性が指摘されている。

発掘調査と研究の初期段階においては，このような古墳に葬られた被葬者の姿について関心が集中した。多様な見解が提示され，鉄などの資源を獲得するために海を渡った倭人という説〔東1995〕，甕棺古墳の系譜を引く在地首長という説〔申敬澈2000，최성락2004，정기진2014〕，倭で出生したが百済の朝廷に出仕した倭系百済官僚という説，〔朱甫暎2000，朴天秀2006・2007〕，倭地に



図2 光州月桂洞の前方後円形古墳(2号墳)

しばらく居住した後に復帰した馬韓系の倭人説 [임영진 1994] などに整理することができる。

その後の発掘調査の進展とともに、事例が増加するとともに本格的な研究が推し進められ、前方後円形古墳⁽¹⁾についての認識は、広まりをみせるようになった [대한문화유산연구센터 2011]。墳形、葺石や段築の有無、後円部と前方部の築造順序、埴輪形土製品 [국립나주문화재연구소·전남대학교 박물관 2015]、その製作工人や工房、墓制や葬制など、様ざまな分野にわたる資料が修正されとともに、研究が進められている。

3. 倭系文物についての認識の広まり

栄山江流域の前方後円形古墳についての関心とともに、より東方の南原地域 [호남고고학회 2014] や蟾津江流域 [전상학 2015]、さらには韓半島の南海岸一帯についても注目されるようになった。

慶尚南道の固城松鶴洞1号墳は小加耶地域の王陵級古墳であり、早くから前方後円形古墳である可能性が提起されていた。発掘調査の結果、3基の円形墳墓が接続し、前方後円形古墳と類似した外形を呈するようになったことが確認された。一部の石室(1B-1号)の構造や出土遺物が、日本のものと類似することも明らかとなった。それ以外に、宜寧景山里や雲谷里、巨濟長木、泗川船津里・香村洞などで発見された石室もまた、その構造や葬法が日本的であることが確認され、慶南海岸地域にも倭系古墳が広く分布することが明らかとなった。したがって、栄山江流域のみならず南海岸一帯を研究対象として設定しなければならず、前方後円形という墳形だけではなく、石室構造、石棺、埴輪、出土遺物などにあらわれる倭系要素もあわせて考慮する必要が生じた [洪潛植 2006]。

このように、墓制や葬制、遺物などに認められる倭系要素は、栄山江流域にとどまらず、宜寧、巨濟、固城、昌原など、慶尚南道の海岸地域に広く分布している。特異な点は、慶南一帯では確実な前方

後円形の墳丘は確認されておらず、石室構造や、須恵器・土師器・鉄鏃・鉄鉾・板甲などの一部の遺物に倭系要素が観察される状況である。

韓半島南部において、倭系古墳や文物が登場する背景として、6世紀初めに日本社会に多大な変化を招来した継体王朝の登場に注目する見解〔小栗2000〕がある。いまだ、韓国学界では初歩的な議論にとどまり〔권오영2012〕、本格的な検討には至っていない。この時期は、百済の武寧王代にあたり、百済と倭や加耶の間で複雑な外交交渉が展開しており、榮山江流域の政治体が、百済中央に完全に服属する時期にもあたる。百済―倭の関係史についての理解を基礎としながら、各政治体の躍動的な動きを描いていくためには、継体期に対する考古学や古代史の成果に対する理解が必要であることを示していよう。

③……………韓半島と日本列島の交流についての認識

榮山江流域をはじめとする韓半島南部の倭系要素についての関心をこえて、韓半島と日本列島の間で展開された人的、物的交流についての関心も高まっている。その特徴は20世紀前半期のような軍事的、政治的進出という枠組みを脱し、双方向的な交流の実像を追跡するところにある。従前の文献的な検討による百済と倭の交渉についての研究は、韓日の学界ともに中央権力間の交渉の検討にとどまっていたが、考古学的資料を通じた研究の結果、日本列島における百済系渡来文化というものが、百済中央のみならず地方、特に榮山江流域と関連する部分の比重が高いことを明らかにしている。

1. いわゆる渡来人についての認識

韓半島から日本列島へ移住した住民たちの歴史には長いものがあるが、本格的な関心の対象は弥生時代からである。古墳時代に入ると、それ以前とは質的に異なる大規模な移住がはじまり、数多くの韓半島系住民が日本列島へ移住、定着するようになる。彼（彼女）らは日本学界において渡来人と定義されており、彼（彼女）らによって持ちこまれた文化全般が渡来文化と呼称されている。

ただ、「渡来」という用語は、「海を渡って来た」という意味であり、日本が主体となっている。したがって、韓国学界では「移住」という用語を使用して、「移住民」、「移住民文化」と代替することもある。あるいは、より意味を鮮明にしようと、「渡倭人」、「渡倭文化」という用語を使うこともある。

古墳時代以後の渡来人の役割についての評価がなされるようになり、現在では渡来人や渡来文化の研究は、日本の古墳時代研究の重要なテーマのひとつとして認められている。日本列島各地で確認される散発的な渡来人や渡来文化の痕跡を、体系的に理解しようという研究も試みられている〔亀田1993・2005〕。主な論題は、渡来人の移住の契機が自発的であったのか、それとも強制的であったのかについての判定、倭の側の意志がどの程度であったのか、渡来人の故地、渡来人がもたらした変化などである。渡来人と関連する研究素材は非常に多様であり、古墳、集落、物品（土器や金工品など）、技術（須恵器や鉄器生産、敷葉工法などの土木建築）、思想や宗教（仏教、水辺祭祀）、伝承など、多方面にわたる。



図3 韓日の炊事用土器の比較

(左上: 栄山江流域 右上: 福岡県西新町遺跡 左下: 大阪府葦屋北遺跡 右下: 大阪府長原遺跡)

渡来人についての研究が進展することに伴い、百済中央の役割に比肩するほどに栄山江流域の役割が高かったことが、徐々に明らかとなっている。その分野は、住居址、韓式系土器、水辺祭祀などにわたる。

日本列島において韓式系土器が出土する地域は、非常に広範にわたり、近畿地域では大阪府長原、葦屋北、奈良県南郷、などの諸遺跡が代表的である [田中 2005]。そして、その器種構成、器形、製作技法などからみて、韓式系土器の多数が栄山江流域と関連を有するものであることが、次第に究明されていった (図3)。カマドまたはオンドルを備えた住居に必要な土製煙筒もまた、韓半島南部においては馬韓-百済圏から主に出土し、その中でも栄山江流域の出土例が数多い。

カマドの焚口に取りつけられるU字形土製品も、日本列島では近畿地域にのみ分布し [濱田 2004]、韓半島では馬韓-百済圏の特徴的な遺物である [서현주 2003]。大阪府葦屋北遺跡⁽²⁾では、破片として621点、推定個体数290点に達する膨大な量の韓式系土器が出土し [藤田 2009]、その形状や製作技術は栄山江流域のものと酷似しており [권오영 2009]、両地域間の交流の実態をかきみることができる。

この時期の交流の質的变化の要因として、継体朝の登場を論じる研究が非常に多い。それにもかかわらず、同時代の百済の武寧王代についての関心へと向かわない点は、惜まれる。また、日本の古墳時代研究の重要な成果のひとつである都出比呂志の前方後円墳体制論を果たして栄山江流域に適用することが妥当であるか否かについての、本格的な議論もいまだなされてはいない。

2. 倭人と倭系文物についての認識

最近の日本学界の傾向は、古墳自体についての関心を一歩進めて、韓半島と日本列島の両地域において共通して確認される遺物の中で、いわゆる倭系遺物と呼ばれるものに対する研究が進んでいる。特に甲冑〔橋本2016〕や武器〔鈴木2016〕などを対象として、本格的な議論がはじまっている。

以前、鉄製板甲は加耶地域の事例がよく知られていたが、近年では高興地域の野幕古墳や吉頭里雁洞古墳、新安ベノルリ古墳のように倭系要素を有する古墳はむろんのこと、清州新鳳洞古墳や陰城望夷山城などで出土している。その中の一部は倭系と判断しえることを基礎として、ヤマト政権中枢で板甲が製作され、日本列島と韓半島の一部の地域首長に配布された可能性が提起されている。

しかし、高興野幕、新安ベノルリ古墳のような小型ながらも倭系の古墳構造を有し、多くの副葬品が武器類である古墳と、釜山蓮山洞古墳群のように、当時の釜山地域の最高首長の古墳を同一の脈絡で説明することは難しいのではなからうか。

栄山江流域を含めた南海岸一帯の倭系文物について、韓国学界の研究傾向は大きく2つに整理できる。ひとつは、栄山江流域の政治体の性格を究明することに、最終的な目標を定める立場である。この場合、甕棺古墳や、前方後円墳などの倭系古墳に葬られた人物の姿に、研究が集中する。もうひとつは、百濟、加耶と倭の関係史の一環として、韓半島南部の倭系文物と日本列島の渡来系文物を検討する流れである。

この2つの傾向は分離されるものではなく、相互に緊密な関連性の中で進められてはいるが、いまだ多くの限界をかかえている。まず、韓半島と日本列島の交流についての巨視的な理解が不足している点である。文献史学において進められた研究に対する理解を基礎には置かず、新たな発見—その多くは発掘調査の結果として確認される素材—に左右されて研究を進めてしまうがために、全体的な様相を把握しえないまま、個別具体的な素材の研究にとどまってしまう場合がある。例えば、栄山江流域をはじめとする南海岸地域に点在する倭系石室についての研究は、日本における類例を探索しその系譜を追跡する次元にとどまっている。被葬者の具体的な性格、異質な墓葬制が南海岸に遺された背景についての研究が急がれる。

このような問題を解決するためには、必ず巨視的な観点が必要となる。例えば、日本列島に遺された渡来系文化と比較する時、韓半島南部の倭系文化は集落の不在、連続性の欠如（単発性）という特徴をみせる。より細部的に検討すれば、嶺南では弥生（系）土器が出土する集落と倭系石室のいずれもが確認されるが、栄山江流域においては古墳関連の要素（墓制、葬制、副葬品）が色濃く認められる反面、集落は確認されていない。このような差異が何を意味するのかについての考察が必要であろう。

韓国の考古学界の最大の限界は、日本の古墳時代研究者の不足である。その結果、韓半島で出土する倭系要素の抽出と解釈に困難が生じているばかりではなく、日本の渡来系文化を検討する際にも、韓半島と関連する韓式系土器の抽出にとどまり、そのような文化が当時の日本社会にどのような影響を与えたのかについての理解が欠如している。近年では、考古学的に韓半島と日本列島の交渉を追跡しようという研究〔朴天秀2007〕が発表され、大阪の河内地域についての研究〔양기석・노승국ほか2016〕もはじまっているが、より深化した研究がなされる必要があるだろう。

④……………韓半島西南部における倭系古墳の多様性

1. 倭系文物と倭系古墳の判別基準

筆者もこれまで述べてきたような限界をこえることは難しいが、栄山江流域の政治体の性格を究明するためには、韓半島南部の情勢のみならず古墳時代中後期の日本列島の状況を総合的に検討しなければならないという、当為性については痛感している。そこで、今後の研究の進展のために、いくつかの概念的な問題を取り上げてみたい。

まず、倭人、倭系、倭の影響を受けた在地系（人）などの概念についての定義が必要である。日韓両国の史書をひも解くと、交渉を担当する人物は韓半島と日本列島の政治的な状況をよく理解していることがうかがえる。父系と母系がそれぞれ韓半島と日本列島に分かれている場合、ひいては中国系として韓半島に定着した後に、さらに日本列島へ移住する場合など、様々な状況を確認できる。したがって、韓人と倭人、あるいは中国人と百濟人などの二分法は、現象を歪曲してしまう恐れがある。

韓半島南部には日本列島から移住して定着する集団も多かった。この集団を倭系移住民と定義する場合、日本学界の渡來人に対する研究方法論を参考にする必要はある。例を挙げれば、倭系と判定する根拠は何であり、複数の根拠がある場合により本質的な根拠は何か、という模索である。古墳研究に適用すると一機械的な適用は警戒しなければならないが一葬制>墓制>副葬品の順序となる。より具体化すれば、埋葬儀礼>墳形>埋葬施設の構造>金工品>土器という順序に整理できる。すなわち、副葬品に在地的な属性を多く有していたとしても、墓制や葬制が日本列島と相通するものであれば、被葬者は日本と関連を有する人物であった可能性は高くなる。

しかしながら、具体的な事例にこの図式を当てはめてみると、それほど簡単な問題ではないことも浮かびあがってくる。果たして、この図式が妥当であるか否かも明らかではなくなってくる。特に、墳形（古墳の外観）と埋葬施設のどちらがより本質的な要素なのであろうか。例えば、方台形墳丘に倭系石室を設け、百濟中央産の金工品と在地土器が副葬された羅州伏岩里3号墳1996年調査石室や、方台形墳丘に葺石を葺き形象埴輪を樹立する一方で、中国産陶磁器が出土した咸平金山里方台形墳、そして方台形墳丘に埴輪形土製品を樹立する一方で専用甕棺を埋葬した羅州新村里9号墳、これらの古墳の被葬者の中で誰が倭人で誰が在地首長層なのであろうか。

以上のような疑問を認識しつつ、多様な倭系古墳を整理する方法を提示してみたい。住居址や祭儀施設、生産施設などを除いて古墳に限定したとしても、栄山江流域は、倭系、在地系、百濟中央などの要素、そして中国産遺物など、非常に多様な要素を有している。

まずは、倭系要素がわずかでも認められる古墳もふくめて、この多様な様相の両極の類型を設定してみる。孤立的で海路に接する立地、先行する墳墓との継承性の不在、倭系の古墳構造、土器を副葬しないこと、鉄製武器特に倭系武器の副葬、このような特徴を示す新安ベノルリ3号墳（図4）、高野興幕古墳をひとつの類型と把握することができる。その反面、須恵器または須恵器に類似する土器が少量副葬されるが、古墳築造の連続性、墳形、埋葬施設、副葬品の種類や副葬様相において

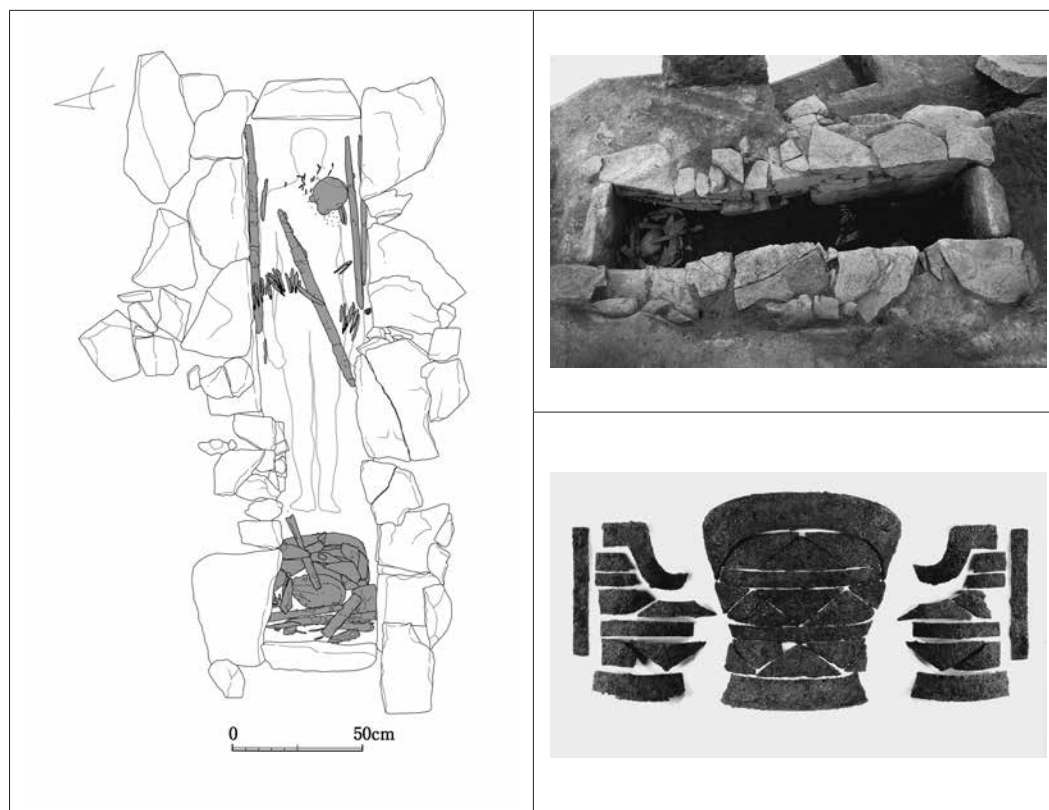


図4 新安ベノルリ3号墳と出土遺物

在地的な伝統が維持される高敞鳳徳古墳群が、ひとつの類型として設定できる。鳳徳里では、須恵器の可能性ある土器が少量確認されたが、中国産青磁、百済中央産の飾履の存在が目される。

それならば、立地、墓制と葬制、副葬品がいずれも倭的なベノルリ、野幕を一方の極の類型とし、倭系要素が少量の副葬品に限定される鳳徳をもう一方の極の類型とすることで、その間にそれぞれの古墳を配置してみよう。

それにはまず、在地的要素の有無、強弱について考慮する必要がある。立地、先行する墳墓との連続性、墳形と外観（葺石、段築など）、埋葬施設の種類と形態などが、注目される。

次に百済中央との関連性である。百済中央産の威勢品（≒威信財）の所有有無と種類（セット関係）が基準となろう。最近では柴山江流域においても中国南朝産の陶磁器類が確認されており、重要な変数となる。この場合、百済中央産の威勢品が副葬された咸平新徳、高興雁洞、中央を経由した中国南朝の物品が副葬された海南龍頭里、咸平馬山里杓山などの前方後円墳や、咸平金山里方台形墳、それ以外にも百済中央の威勢品、倭の墓制や葬制の影響が認められる大部分の前方後円形古墳を事例として挙げるができる。

さらに倭の影響は、多様な場合に分けることができる。すなわち、墓制や葬制にまで及んでいる場合、埋葬施設にのみおよんでいる場合（羅州伏岩里3号墳）、墳形にのみ認められる場合、墳形と埋葬施設いずれに認められる場合（光州月桂洞、咸平新徳）、葬制にのみ認められる場合（羅州新村里9号墳の円筒形土器）などである。

以上の内容を整理すると、次のようになる [권오영 2017]。

- A: 構造や葬法, 遺物がすべて倭的な場合: 高興野幕古墳, 新安ベノルリ古墳
- B: 前方後円墳を模倣した構造と葬法が認められる一方で, 在地的な要素や百済の影響が共存する場合: 大部分の前方後円形古墳
- C: 構造と葬法に倭の要素が一部認められるが, 在地産の遺物または百済中央関連の威勢品が存在する場合: 羅州伏岩里3号墳 96年調査石室, 羅州丁村古墳, 高興吉頭里雁洞古墳
- D: 構造は在地的であるが, 葬法や遺物に倭の要素が多く認められる場合: 咸平金山里方台形墳
- E: 構造と葬法は在地的で, 倭系遺物が少量認められる場合: 高敞鳳德里1号墳
- F: 横穴墓という独特な構造, 倭系遺物と類似した副葬品が存在する場合: 公州丹芝里遺跡

2. 倭系要素の多様なスペクトラム

倭系古墳または前方後円形古墳の被葬者を, 一言で規定することは無理である。慶尚南道を含む南海岸一帯に, 前方後円形古墳ではなくても倭系の石室構造, 倭系遺物が確認される状況を勘案すれば, それらの被葬者の姿は単一ではなく, 非常に多様であったと考えられる。

前方後円形古墳の大部分の埋葬施設が, 九州の横穴式石室と類似する点を重視すれば, その被葬者は倭人である可能性は高いように見える。しかし, 詳細に検討すれば, 外形は前方後円形であるが段築や葺石などの施設がない事例が多い点から, 日本の前方後円墳とは差異がある。埴輪形土製品についても, その外形的な類似性, 墳丘に樹立される共通性にもかかわらず, 胎土や製作技法から在地の陶工によって製作されたと判断される。副葬遺物は, 主にこの地域で生産された土器であるが, 百済中央から賜与された装身具などの副葬品も含まれている。それでは, 大部分の前方後円墳の被葬者は誰か。筆者は在地首長層であった可能性が高いと考えている。

倭人の墓である可能性が最も高い, 野幕古墳とベノルリ古墳は, 強力な在地勢力の不在, 一世代での造墓の終了, 海路上に位置する点などから, 船団を護衛していた倭系の武将とみることができ。公州丹芝里など熊津期の百済都城の周辺に配置された横穴墓の被葬者は, 『日本書紀』によれば, 東城王が帰国する時に彼を護送した筑紫軍士500人の中の一部が, 葬られている可能性がある。しかしながら, 横穴墓という墓制を除けば, 考古学的な根拠をさらに追加し得るか疑問である。

百済中央との関係についても考慮する必要がある。百済中央と直結するのは, 陵山里型石室を埋葬施設とする古墳であろう。ここにも多様な状況が存在する。前方後円形古墳を築造した在地首長層の次の世代が埋葬されたとみられる咸平新徳2号墳のような場合もあれば, 新安道昌里古墳のように突如として出現し, 中央人の派遣を想起させる場合もある。

このように, 先にA~Fの6つの類型に, 中国産物品の有無, 百済中央の影響などの変数を追加すれば, さらに多くの状況が浮き彫りとなってくる。特にBの場合, 日本の前方後円墳の構造や葬法をどの程度まで総体的に採用したのか, 百済中央産の威勢品の有無と頻度などを勘案すれば, 在地的な要素と日本的な要素の間における多様なスペクトラムを想定することができよう。このことを踏まえつつ, 類型ごとの被葬者の姿, そしてこのような古墳が登場する背景について, 簡略に整理する。

-
- A：倭人の墓である可能性が高い。日本で成長し、日本を出発して何らかの役割を担っていたが、その途中で死亡し、現地に葬られたのであろう。
- B：在地首長の墓である可能性が高い。構造と葬法において日本の前方後円墳を採択した理由、百済との関係などについては多様な偏差が認められる。地域社会の政治的動向が非常に複雑で流動的であったことを意味する。より百済に近い場合とより倭に近い場合とが混在している。
- C：在地首長の墓であらう。前方後円形という墳形までも採用した前方後円形古墳の被葬者との相違点が注目される。また、百済中央の威勢品を副葬する点は共通的であるが、鉄製板甲の副葬有無によって、羅州伏岩里3号墳・丁村古墳と、高興吉頭里雁洞古墳の間に差異が内在している。
- D：基本的に在地首長の墓である可能性が高いが、B、C類型との差異がはっきりとしない。類例が増加すれば、性格がより明らかにならう。
- E：明らかに在地首長の墓であり、日本の政治体との交渉もそれほど活発ではなかったようである。倭系物品を入手する過程は、他の政治体を通じた間接的な形態であったと考えられる。
- F：東城王の即位と関連した九州出身の人物、およびそれに関連した人物（子孫などをふくむ）であった可能性が高い。栄山江流域ではなく、都城周辺に葬られた点において、A～E類型とは差異をみせる。

倭系古墳や倭系の要素を示す古墳のみを対象としても、これほど複雑な様相を呈している。ここに、集落から出土する弥生土器や土師器、須恵器、百済王城で発見される須恵器なども考慮すれば、問題はさらに複雑化していくであろう。また、栄山江流域の前方後円形古墳の問題は、あえて言えば、古代韓日関係史に関連する様々なテーマのひとつにすぎず、この問題の検討だけでは、複雑な古代韓日関係史を復元していくことはできないのである。

おわりに

これまで、栄山江流域の政治体を見とおす多様な視角、そしてその実態を明らかにしていくための努力と限界について整理してきた。やはり、栄山江流域のみを対象としたり、南海岸のみを対象としたりする研究をこえて、韓半島南部と日本列島全体を視野に入れた幅広い研究の必要性を痛感する。九州や近畿のみならず、和歌山、三重、愛知、鳥取、島根などは無論のこと、関東圏までも視野を広げていかなくてはならない。それは、韓半島に移入された倭系の要素には、九州や近畿だけではなく、広域な地域の要素が含まれているためであり、韓半島系の渡来人、渡来文化もまた九州や近畿を越えて広域に広がっていることが確認されているためである。

その次に、栄山江流域に百済中央の影響が認められる時期や、その段階の設定が優先して行われる必要がある。それは客観的な資料に即して構築される必要がある。現在では、土器の器種〔徐賢珠2008〕や集落の変動〔李暎澈2013〕からの接近はなされているが、加えて漢城期百済の墓制が栄山江流域に影響を与えていたのか否かについて、検討が必要であろう。この点については、漢城期の横穴式石室と酷似する康津秀陽里1号石室墓の年代についての検討も必要である。

あわせて、新たな方法論の開発が必要である。移住と渡来（図5）、交流に関する多様な事例の比



図5 山口県土井ヶ浜遺跡

(左上：弥生時代の人種構成 右上：人骨出土状況 左下：縄文人 右下：渡来系の弥生人)

較検討や、古代東北アジアの航海や寄港地 [高田 2017] についての関心が求められる。韓半島南海岸と日本列島の各所の寄港地を連結する方式で設けられたと想定される航路や、航海にのぞんだ船団、黄海の目的や過程などが研究対象となり得よう。例えば、予期せぬ波風や海賊などによって遭難し、島嶼部や海岸に漂着し、現地人との交易や紛争、略奪や婚姻などの関係が生じた時、それがどのような考古学的痕跡として遺されるのかについての考慮も必要となろう。

前方後円形古墳または倭系古墳の被葬者像、その出現背景を単純明快に提示する時期はすでに過ぎた。それは、当時の韓半島南部と日本列島の交渉はそれほど単純なものではなかったためである。国籍、血統、身分などが多様な人びとが、多様な目的（政治外交、戦争、商業など）を持って、多様な経路を利用して往來を重ねる、そのような躍動的な活動の結果が倭系文物や渡来系文物であったろう。

註

(1)——韓国学界においても、初期には前方後円墳という用語を用いていた。しかし、日本学界の有力なモデルである前方後円墳体制論の解釈の如何によって、「前方後円墳が分布する地域はそのままヤマト政権の勢力が及んだ範囲」というようにみなされてしまう危険性が指摘された。日本列島の前方後円墳と形態的に類似することは事実であるが、それに前方後円墳体制論をそのまま適用することはできないために、前方後円形古墳とよぼうという発想である。その一方で、柴山江流域では、この

ような巨大な古墳の形が伝統楽器の長鼓に似ているとみて、長鼓墳と呼ばれる場合も多い。本稿では暫定的に、前方後円形古墳という用語を用いる。

(2)——この遺跡で出土した韓式系土器もまた、柴山江流域との関連性が強く、馬飼集団が遺したものと理解されている(宮崎2010)。よって、日本列島に馬匹が入ってくる際には、柴山江流域の政治体の役割があったことをうかがい知ることができる。

参考文献

(韓国語)

- 강봉룡 1999a 「영산강유역 ‘웅관고분’ 의 대두와 그 역사적 의미」 『韓國史論』 42
- 姜鳳龍 1999b 「柴山江流域 政治體의 性格」 『韓國 古代史 研究의 새 動向』 韓國古代史學會
- 姜鳳龍 2000 「柴山江流域 古代社會 性格論」 『柴山江流域 古代社會의 새로운 照明』 歷史文化學會・木浦大學校博物館
- 姜仁求 1984 『三國時代 墳丘墓 研究』 嶺南大學校 出版部
- 姜仁求 1987 『韓國의 前方後圓墳 舞妓山과 長鼓山』 韓國精神文化研究院
- 국립나주문화재연구소 2009 『한국의 고대 웅관』
- 국립나주문화재연구소 2010 『영산강유역의 고분 I 웅관』
- 국립나주문화재연구소 012 『웅관고분사회 주거지』
- 국립나주문화재연구소・전남대학교박물관 2015 『한국의 원통형토기 (분주토기)』 I・II
- 權五榮 2005 「考古學資料로 본 百濟와 倭의 關係」 『倭 5 王 문제와 韓日關係』 韓日關係史 研究論集 2
- 權五榮 2007a 「柴山江流域 政治體의 性格」 『韓國 古代史 研究의 새 動向』 韓國古代史學會
- 권오영 2007b 「住居構造와 炊事文化를 통해 본 백제계 이주민의 일본 畿内地域 정착과 그 의미」 『한국상고사학보』 56 한국상고사학회
- 권오영 008 「壁柱建物에 나타난 백제계 이주민의 일본 畿内地域 정착」 『한국고대사연구』 49 한국고대사학회
- 권오영 2012 「繼體王朝의 등장을 둘러싼 고고학적 환경」 『백제문화』 46 공주대 백제문화연구소
- 권오영 2017 「전방후원형 고분과 고대 한일관계」 『우리시대의 한국 고대사』 2 한국고대사학회편
- 宮崎泰史 2010 「키나이(畿内)에 정착한 백제계 馬飼集團—오사카 시토미야키타유적을 중심으로—」 『마한・백제 사람들의 일본열도 이주와 교류』 중앙문화재연구원・국립공주박물관・백제학회편
- 金洛中 2009 『柴山江流域 古墳 研究』 學研文化社
- 金洛中 2011 「柴山江流域 政治體의 成長과 變動過程」 『百濟學報』 6 百濟學會
- 金洛中 2013 「5~6世紀 南海岸地域 倭系 古墳의 特性과 意味」 『湖南考古學報』 45 湖南考古學會
- 金英心 2000 「柴山江流域 古代社會와 百濟」 『柴山江流域 古代社會의 새로운 照明』 歷史文化學會・木浦大學校博物館
- 大韓文化遺產研究센터編 2011 『韓半島의 前方後圓墳』 學研文化社
- 東新大學校文化博物館 2015 『新安 안좌면 음동・배널리 古墳群』
- 朴淳發 1998 「4~6世紀 柴山江流域의 動向」 『百濟史上의 戰爭』 忠南大學校 百濟研究所
- 朴天秀 2006 「柴山江流域 前方後圓墳을 통해 본 韓半島와 日本列島」 『百濟研究』 43 忠南大學校 百濟研究所
- 朴天秀 2007 『새로 쓰는 古代 韓日交涉史』 社會評論
- 서현주 2003 「삼국시대 아궁이틀에 대한 고찰」 『한국고고학보』 50 한국고고학회
- 徐賢珠 2008 「柴山江流域圈 3-5世紀 古墳 出土遺物의 變遷樣相」 『湖南考古學報』 28 湖南考古學會
- 成洛俊 1997 「百濟의 地方統治와 全南地方 古墳의 相關性」 『百濟의 中央과 地方』 忠南大學校 百濟研究所
- 成洛俊 2000 「柴山江流域 甕棺古墳의 性格」 『柴山江流域 古代社會의 새로운 照明』 歷史文化學會・木浦大學校博物館

- 成正鏞ほか 2012『百済와 荣山江』學研文化社
- 小栗明彦 2000「全南地方 出土 埴輪의 意義」『백제연구』32 충남대학교 백제연구소
- 申敬澈 2000「고대의 낙동강, 영산강, 그리고 왜」『韓國의 前方後圓墳』忠南大學校 出版部
- 양기석·노중국ほか 2016『한류 열풍의 진앙지 일본 가와치 河内』주류성
- 梁起錫ほか 2013『全南地域 馬韓 小國과 百濟』學研文化社
- 禹在炳 2004「荣山江流域 前方後圓墳의 出現과 그 背景」『湖西考古學』10 湖西考古學會
- 禹在炳 2006「5~6 世紀 百濟 住居·煖房·墓制文化의 倭國 傳播와 그 背景」『韓國史學報』23 高麗史學會
- 李暎澈 2013「據點聚落의 變異를 통해 본 荣山江流域의 古代社會」『韓日聚落研究』韓日聚落研究會
- 林永珍ほか 2016『馬韓 墳丘墓의 起源과 發展』學研文化社
- 임영진 1994「광주 월계동의 장고분 2기」『한국고고학보』31 한국고고학회
- 林永珍 2000「荣山江流域 石室封土墳의 性格」『荣山江流域 古代社會의 새로운 照明』歷史文化學會·木浦大學校 博物館
- 林永珍 2003「韓國 墳周土器의 起源과 變遷」『湖南考古學報』17 湖南考古學會
- 임지나 2016『호남지역 고분 축조기술의 연구 -분구 축조기술을 중심으로-』목포대학교 석사학위논문
- 전상학 2015「섬진강유역 고분의 성격」『섬진강유역의 고고학』제 23 회 호남고고학회 학술대회
- 정기진 2014「전남 서부지역 전방후원형분 축조세력 검토」『야외고고학』19 한국문화재조사연구기관협회
- 鄭在潤 2010「荣山江流域 前方後圓墳의 築造와 그 主體」『歴史와 談論』56 湖西史學會
- 田中俊明 2000「荣山江流域 前方後圓形 古墳의 性格」『荣山江流域 古代社會의 새로운 照明』歷史文化學會·木浦 大學校博物館
- 中央文化財研究院·國立公州博物館·百濟學會 2010『馬韓·百濟 사람들의 日本列島 移住와 交流』서경문화사
- 崔盛洛 2004「前方後圓墳 性格에 대한 再考」『韓國上古史學報』44 韓國上古史學會
- 韓玉珉 2016「荣山江流域 古墳의 墳形과 築造過程 研究」목포대학교 박사학위논문
- 호남고고학회 2014『가야와 백제, 그 조우의 땅 남원』호남고고학회
- 洪漕植 2005「荣山江流域 三國時代 古墳文化의 性格과 推移」『湖南考古學報』21 湖南考古學會
- 洪漕植 2006「韓半島 南部地域의 倭系 要素-紀元後 3~6 世紀代를 中心으로-」『韓國古代史研究』44 韓國古代史 學會
- (日本語)
- 青柳泰介 2005「大和の渡来人」『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版
- 東 潮 1995「荣山江流域と慕韓」『展望考古学』考古学研究会 40 周年記念論集
- 岡内三眞編 1996『韓國의 前方後圓墳』雄山閣
- 亀田修一 1993「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』30(中)九州古文化研究会
- 亀田修一 2005「地域における渡来人の認定方法」『九州における渡来人の受容と展開』第8会九州前方後圓墳研究会資料集
- 鈴木一有 2016「朝鮮半島出土倭系の武裝具の全容」『古代日韓交渉の実態』国立歴史民俗博物館
- 高田貫太 2017『海の向こうから見た倭国』講談社現代新書
- 田中清美 2005「河内湖周辺の韓式系土器と渡来人」『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版
- 橋本達也 2016「古墳時代中期の武裝具体系とその意義」『古代日韓交渉の実態』国立歴史民俗博物館
- 土生田純之·亀田修一編 2016『季刊考古学 特集古墳時代・渡来人の考古学』137 雄山閣
- 濱田延充 2004「U字形板状土製品考」『古代学研究』167 古代学研究会
- 藤田道子 2009「葦屋北遺跡出土のU字形板状土製品について」『葦屋北遺跡 I』大阪府教育委員会
- 吉水眞彦 2005「6・7世紀における近江の渡来文化」『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版

(ソウル大学校国史学科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018年5月24日受付, 2018年8月3日審査終了)

Perspectives on the Ancient Political Bodies of the Yeongsan River Basin

KWON Ohyoung

This paper attempts to present a compilation of current opinions about the character of the political bodies of the Yeongsan River Basin and the exchanges between Wa and the Yeongsan River Basin in three kingdoms. It also aims to define the concepts and research methodology for the advancement of future research. We reviewed past interpretations about the southern expeditions by the Geunchogo of Baekje in the document materials about the Yeongsan river basin and toraijin (people from overseas, especially from China and Korea, who settled in early Japan and introduced continental culture to the Japanese people). The historical documents also relate to the Wa lineage's culture and civilization depicted in the past relations between Japan and Korea. The goal was to organize relevant issues and perspectives.

Our main focus was on the Wa lineage's Kofun or ancient tombs in the southwestern part of the Korean Peninsula, including the Yeongsan river basin. We attempt to classify from A to F the characteristics of buried persons and point out the need to consider the diversity further. If one would venture into, for instance, the issue of the large key-hole shaped tomb mounds of the Yeongsan river basins, it would be clear that this is only one of the various themes of the ancient history of the Japan-Korea relations. The period exhibiting the buried figures of the large key-hole shaped tomb mounds, the background of their appearance, and the Wa lineage's Kofun in a plain and straightforward way must have already passed.

The diversity recognized in the Wa lineage's Kofun shows that the negotiations between the southern part of the Korean Peninsula and the Japanese archipelago were very complex. In other words, it is essential to understand that it reflects the results of the dynamic activity of people with various nationalities, lineage, and status, and with different aims (such as political diplomacy, war, and commerce) who used a variety of pathways and accumulated mutual visits.

To steadily elucidate the situation, it will be necessary to have a broad range of research that takes into consideration the southern part of the Korean Peninsula and the entire Japanese archipelago rather than limit ourselves to areas such as the Yeongsan river basin and the south coast of the Korean Peninsula.

Key words: Mahan confederacy, Yeongsan river basin, Wa lineage kofun, diversity
